

「イエスはここにはおられない」

詩編
マルコによる福音書

第16編 7節～11節
第16章 1節～8節

説教 岡村 恒牧師

「あの方は復活なさって、ここにはおられない」。 (6節) この言葉は、主イエスが復活なさった日に、その墓で響いた言葉です。

ゴルゴタの丘の上で、主イエスは十字架に架けられて、肉を裂かれ、血を流されて死なれました。何人かの婦人たちはこれまで、主イエスに従って来て、主イエスの死と、墓に葬られる様子とを目撃しました。一番最後まで主イエスのお姿を見届けました。その翌日、婦人たちは香料と、おそらく遺体を包むための布などを用意しました。そして、日曜日の朝、夜が明けのを待っていました。「週の初めの日の朝ごく早く、日が出るとすぐ墓に行った」(2節)のです。

待ちわびていました。一刻も早く墓に行って、主イエスのお体に香料を塗って、なんとかきちんと葬って差し上げたい。最後の最後まで主にお仕えしたい。婦人たちは一番最後の務めのために、深い悲しみを抱えて、墓に向かいました。

墓のこと、主イエスの亡骸のことばかり考えていた婦人たちは、下を向いて、心の一番奥底の悲しみだけを見つめていました。心の中に開いた大きな穴、空虚な思いに目を奪われていました。主のご遺体を葬ること以外には、もう何も考えることができませんでした。

「ところが、目を上げて、そして見た」(4節)、と聖書は記します。彼女たちは目を上げました。心の中の思い出や悲しみから目をあげて、目の前の出来事に目を向けました。巨大な石は既にわきへ転がしてありました。主イエスの遺体が安置されている墓に入って行き、主イエスの遺体を目にするはずでした。今日も、多くの人が、聖書の中に死んだお方、死んだ過去の人物としての主イエスを探しています。しかしそこには主イエスはおられないのです。

驚いて言葉も出ない、おそらくは思考停止状態に陥ったマリアたちに向かって、白い長い衣を着た若者が語りかけます。「驚くことはない。…あの方は復活なさって、ここにはおられない。」(6節)。『見よ！主を横えた場所を！』と御使いは語りかけました。主の使いは、主が十字架に架けられたこと、死んで葬られたことを否定しません。あのお方は確かに死んだ、しかし復活なさったのだ。今、生きておられる。だから、この死人のいるべき場所にはもうおられないと、ただこの事実だけを告げたのです。

死人の復活というとうてい信じられない事件に遭遇した時の人間の姿を、聖書はありのまま描きます。婦人たちは正気を失いました。元の言葉では「エクスターシス ekstasis」と書かれています。主イエスの奇跡を見て信じられない思いで驚き恐れる人の姿を描く時に使われてきた言葉です。

この驚き、我を忘れてボーゼンとする姿は、もう一つの側面を持っていました。使徒パウロのように、神さまからの特別なメッセージを受け取る準備の姿です。神さまのご計画の意味を知るために、人間の知識や感情が壁に突き当たり、もうそれ以上先へ進めないような、そういう地点がどうしても必要なのです。

主イエスの復活は、人間の頭によって考え出され、人間の口によって語り始められた物語ではありません。神さまが成就して下さった奇跡です。そこに居合わせた人間は、誰もが信じることが出来ず、我を忘れて言葉を失ってしまうような出来事でした。神さまのご計画し、実現して下さった私たちの救いは、私たちには信じ難いものです。なぜ、こんなことをしてまで私たちをお救い下さるのか少しも納得がいきません。そんな私たちの思いも主はご存知です。

だからこそ、主は十字架にお架かり下さいました。神さまのなさることを信じることができない、神さまを心の底から信頼することができない私たちのために、主は十字架の上で死に、そして復活して下さいました。

一旦は口を閉ざした婦人たちは、やがて黙ることができなくなりました。剣や鎖も、牢獄も、死も、この婦人たちからたった一つの言葉を奪うことはできませんでした。「主はよみがえられた！」。婦人たちはこの一つのことだけを口にして歩み始めました。このことだけを口にして、生きる者となりました。

私たちも、主の死と復活とを宣べ伝えながら食卓を囲み、やがて再び来て下さる主イエスを待ち望みながら歩んでいます。それは聖書が、今朝も、私たちに語りかけるからです。「驚くことはない。…イエスはよみがえって、ここにはおられない。」主イエスは復活されました。今、生きておられ、やがて再び来て、私たちに主の食卓に迎え入れて下さいます。

(記 岡村 恒)